

# 令和 7(2025)年度 後期授業評価アンケート分析報告書

## 概要

本報告では、令和 7(2025)年度前期授業評価アンケート分析報告書の結果を踏まえ、後期でも同様の傾向が見られるのかを確認した。後期の授業評価アンケートにおいても、前期と同様に理解度と推奨度の項目が設けられた。また、後期の分析でも、平均値に加え中央値も採用し、クラスサイズの大小だけでなく、教養科目と専門科目の区分も行い、アンケートの各項目間の相関関係を確認した。分析の結果、次の点が確認できた。まず、主要項目の推移では、①過去の年度と同様に前期に比べ後期は履修者数と回答率が低下し、興味関心、難易度、総合評価(満足度)、学習時間が微増した。②2021 年度以降の前期・後期の興味関心および総合評価において、2025 年度後期が最も高い値となった。平均値については、2025 年度前期も過去最高値であったことから、2025 年度から授業が改善されたと考えられる。これについては、2025 年度から始まった新カリキュラムの影響の可能性がある。項目間の相関関係では次の点が示された。①クラスサイズが大きい場合、総合評価と授業推奨との間に強い正の相関があった。推奨される授業は、その影響によって履修者数が増えると考えられるため、クラスサイズが大きければ、総合評価と授業推奨との間に正の相関が出やすい可能性がある。なお、クラスサイズの大きさについては、履修登録時に学生がリアルタイムで履修者数を把握できるため、履修者数の多い科目を選ぶ可能性があり、履修者数の多い科目は履修者数がさらに増える可能性がある。②クラスサイズが大きい場合、難易度と内容理解の間に他の項目間よりも強い負の相関がみられるが、クラスサイズが小さい場合、負の相関はみられなかった。クラスサイズが大きい場合、学生への個別対応が難しくなるため、科目の内容を理解してもらうには適切な難易度設定が必要となる可能性がある。③教養科目では、課題分量は総合評価、内容理解、授業推奨との間に負の相関が確認できた。専門科目でも負の相関がみられるが、教養科目ほど強くなかった。教養科目と専門科目の課題分量において学生の認識が異なると見受けられるため、教養科目では課題分量の調整が必要となる可能性がある。④前期と後期の平均値・中央値の結果は、相関の強弱があるものの概ね同じ傾向を示した。⑤前期と後期の比較によって、正の相関については同様の傾向が確認できたが、負の相関については、一部相違点があることが確認できた。

## 第1節 はじめに

千葉経済大学(以下、本学)では、教育内容や教育方法の改善・充実を図ることを目的として授業評価アンケートを実施している。授業評価アンケートについては様々な意見があるが、現在、多くの日本国内の大学において、本学と同様の授業評価アンケートが実施されている。本学では、アンケート結果をもとに授業評価の高い教員を表彰して授業改善への動機づけを行うとともに、評価の高い教員による教授法の事例発表を通じて、授業内容の改善の一助としている。

本学では、前期および後期において授業評価アンケートを実施することとしている。FD 委員会担当者によって授業評価アンケート回答の単純集計を行うだけでなく、FD 委員会内の授業評価アンケートワーキンググループにて集計および分析が行われている。そして、これらの分析を FD 委員会で確認することで、FD に活用している。加えて、結果は教授会において学内に伝達されるほか、Web を通じて学外にも公開されている。

本報告書は、ワーキンググループによる 2025 年度後期授業評価アンケート回答の分析結果を記したものである。本アンケートは授業の改善・充実を目的とするものであることから、授業単位で集計を行い分析している。

令和7(2025)年度においては、過去の年度に行ってきた各アンケート項目の平均値の算出・平均値の推移・各項目の平均値を用いた相関だけでなく、各アンケート項目の中央値の算出および中央値を用いた相関を算出している。これらの結果から、授業改善に資する情報を抽出した。

第2節ではアンケート方法およびその分析方法について記す。第3節では第2節で記した分析方法による結果を記す。第4節は結果の議論および結論に充てる。

## 第2節 授業評価アンケートの実施方法と分析方法

### 第2.1節 授業評価アンケートの実施方法

授業評価アンケートの実施期間・方法・対象を表1に示す。令和7(2025)年度の後期授業評価アンケートは、令和7(2025)年12月16日(火)から令和8(2026)年1月19日(月)(第13週～第15週)に実施した。アンケート実施科目は後期開講科目および通年開講科目(集中講義を含む)である。なお「ゼミナール」および「卒業論文」での実施は適切な結果が得られないと想定されたことから、「ゼミナール」および「卒業論文」はアンケート対象から除外した。また、アンケートは学内ポータル in Campus のアンケート機能を用いたオンラインアンケートとし、各授業内で実施した。

アンケート項目と内容を付録:表1に示す。2025年度より新規の設問として設問11(理解度)と設問12(推奨度)が追加された。設問2から設問8および設問11から設問13までの回答は、1から5までの数値に変換されて保持されている。記述を除く他の設問項目も数値化され、保持されている。

実施期間	令和7(2025)年12月16日(火)から令和8(2026)年1月19日(月)(第13週～第15週)
方法	オンライン(学生ポータルのアンケート機能による)
対象	ゼミナール・卒業論文を除く全開講科目(履修者がいない科目を除く)

表1 授業評価アンケートの実施期間・方法・対象

### 第2.2節 分析方法

本アンケートは授業改善のためのアンケートであるから、授業毎の情報を抽出することとする。具体的には数値化した項目について平均値と中央値を用いて評価する。中央値はロバストな指標であり<sup>1</sup>、順序尺度<sup>2</sup>のデータに対しても問題なく用いることが可能である。その一方で、平均値に比べ、中央値は分布の情報を反映しにくい。そこで本アンケートで得られる数値は順序尺度ではあるが、実務的な面から平均値も用いている<sup>3</sup>。以下では代表値といった場合、平均値と中央値の何れの場合も意味することとする。

まず、本アンケートでの基礎情報として、履修者数・回収率・興味関心・難易度・総合評価(満足度)・課題取組(学習時間)に関する科目の平均値から代表値を算出した。そして、これまでの数値と比較して時間的な変化の有無を確認した<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 中央値は極端な評価の影響を受けにくいいため、授業の評価として妥当である。

<sup>2</sup> 平均値が明確な意味をもつにはデータが間隔尺度または比率尺度でなければならない。

<sup>3</sup> 例えば評価が「3,3,3,3,3」である場合と「3,3,3,5,5」である場合の区別を中央値ではできない。

<sup>4</sup> 2024年度よりゼミナールを除外しているため、その解釈には注意を要する。

次に、アンケート項目の関係性を明らかにするため、項目間の相関係数を計算した。その際、科目の性質に依拠した情報を抽出するため、全科目を対象とした係数だけでなく、特定の区分に属する科目群での相関係数も計算することとした。区分としては(A)全授業、(B)履修者数(20名以上か、20名未満か)、(C)回答数(20回答以上か、20回答未満か)、(D)専門科目と教養科目、を想定し、これらの区分で計算を行った。また、相関係数として各授業の平均値を用いたピアソンの相関係数だけでなく、各授業の中央値を用いたスピアマンの相関係数を算出し、項目間の関係を検討した。

### 第3節 結果

#### 第3.1節 アンケート回答の基礎データ

アンケートの実施科目数は履修者のいない科目を除いた178科目である。これらの科目の履修者数はのべ8,606名である。アンケートを実施した結果、学生からの全回答数は3,254件であった。

このうち回答数が0であった科目は、分析対象から除外した。これはアンケート項目の数値が得られていないことから、平均値や相関係数を計算に含めることが不適切であるためである。このような科目の場合、履修者数および回答率には含める余地もあるが、アンケートの実施状況や回答状況などが適切でなかった可能性もあることから、履修者数および回答率のどちらの計算にも含めないこととした。

表2に本分析の基礎データを示す。分析対象となる科目数は171科目であり、これらの科目の履修者数はのべ8,593人である。回答数は先に記した3,254件である。

分析対象科目数(回答数0の科目を除外)	171科目
分析対象科目履修者数	8,593名
アンケート回収数	3,254件

表2 分析対象科目・履修者数・アンケート回収数

このデータをもとに、各項目の代表値の推移や項目間の関係を推定することとした。

#### 第3.2節 主要項目の科目平均値に対する平均値と科目平均値に対する中央値

表3に履修者数・回収率・興味関心・難易度・総合評価(満足度)・課題取組(学習時間)に関する科目の平均値に対する平均値と、科目の平均値に対する中央値の経年変化を示す。ここで科目平均の平均値とは、各科目における回答の平均値に対して平均値をとったものである。すなわち、各科目 $L$ の項目 $j$ に関する平均値を $L_j$ とするとき、科目平均の平均値 $E(\{L_j\})$ は

$$E(\{L_j\}) = \frac{1}{N} \sum_{j=1}^N L_j$$

である。ここに $N$ は授業数であり、 $\{L_j\}$ は授業の平均値 $L_j$ の集合を意味する。同様に科目平均の中央値とは、上記 $L_j$ の全科目数 $N$ に対する中央値を意味する。

項目	履修者数		回答率		興味関心		難易度		総合評価(満足度)		学習時間	
	履修者数 平均	履修者数 中央値	回答率 平均の平均	回答率 平均の中央値	興味関心 平均の平均	興味関心 平均の中央値	難易度 平均の平均	難易度 平均の中央値	総合評価(満足度) 平均の平均	総合評価(満足度) 平均の中央値	学習時間 平均の平均	学習時間 平均の中央値
2021年度前	37.79	15	0.783	0.830	4.140	4.140	3.750	3.770	4.190	4.210	42.11	38.26
2021年度後	37.21	13	0.758	0.786	4.170	4.160	3.780	3.790	4.190	4.180	48.06	43.88
2022年度前	37.60	15	0.603	0.579	4.138	4.116	3.631	3.656	4.141	4.143	59.53	53.33
2022年度後	37.07	15	0.560	0.545	4.157	4.167	3.731	3.727	4.177	4.185	60.68	56.46
2023年度前	39.89	15	0.616	0.618	4.119	4.167	3.697	3.700	4.143	4.125	53.38	48.75
2023年度後	37.16	14	0.485	0.500	4.187	4.182	3.710	3.714	4.201	4.231	59.46	50.00
2024年度前	59.13	35	0.500	0.511	4.122	4.140	3.730	3.720	4.090	4.130	45.60	42.40
2024年度後	51.61	29	0.494	0.500	4.191	4.221	3.720	3.741	4.221	4.250	50.43	45.00
2025年度前	60.41	39	0.534	0.534	4.239	4.179	3.732	3.714	4.224	4.231	51.75	45.00
2025年度後	50.25	31	0.510	0.500	4.266	4.273	3.763	3.750	4.322	4.333	52.75	48.06

表 3 基礎項目の推移 学習時間は課題取組時間を意味するが、ここでは従来の用語「学習時間」を使用した。

表 3 に示された結果から、令和7(2025)年度においても前期に比べ後期は履修者数と回答率が低下し、興味関心、難易度、総合評価(満足度)、学習時間が微増した。また、2021年度以降の前期・後期の興味関心および総合評価(満足度)において、2025年度後期が最も高い値となった。平均値については、2025年度前期でも、それ以前の結果と比べて興味関心と総合評価(満足度)が最も高い値となったことから、2025年度におけるカリキュラム変更(1年次が対象)が影響している可能性がある。

### 第 3.3 節 項目間の相関

項目間の関係を調べるため、「項目の平均値・中央値」の相関について調べた。対象とする授業の区分は(A)ゼミナール・卒業論文を除く全授業、(B)履修者数(20名以上か、20名未満か)、(C)回答数(20回答以上か、20回答未満か)、(D)専門科目と教養科目、である。ただし、回答数 0 の科目は除外されている。また、相関を計算する際に利用する数値は平均値と中央値の双方を用いた。相関係数は平均値に関してはピアソンの相関係数を算出し、中央値に関してはスピアマンの相関係数を算出した。分析には python (ver. 3.8.3)、pandas (ver. 1.0.5)、matplotlib (ver. 3.2.2)、seaborn (ver. 0.10.1)、japanize\_matplotlib (ver. 1.1.3)を利用した。

#### 第 3.3.1 節 平均値の相関

本小節では項目間の関係を明らかにするため、平均値の相関を算出する。相関係数としてピアソンの相関係数を用いることにする。本アンケートのデータは順序尺度であるため平均値の算出に理論的な問題がある。しかし、データの分布情報を多少は取り込めるため、実務的な側面から、本節では平均値を用いることとする。相関の強弱に関して言及する際は、表 4 に従うものとする。

本報告では平均値の相関をヒートマップで図示した(図 1~7)。ヒートマップはアンケートをもとに興味関心(Q2)、難易度(Q3)、教員からの指示:指示(Q4)、双方向性(Q5)、LMS<sup>5</sup>(Q6)、資料の理解度:資料理解(Q7)、課題分量(Q8)、予習復習時間

$ r  < 0.2$	相関なし
$0.2 \leq  r  < 0.4$	弱い相関
$0.4 \leq  r  < 0.7$	中程度の相関
$0.7 \leq  r  \leq 1.0$	強い相関

表 4 相関係数  $r$  の絶対値と強弱の評価 (ギルフォードの基準)

<sup>5</sup> Learning Management System のこと。

(Q9)、課題の取組時間：取組時間(Q10)、内容理解(Q11)、授業の推奨度：授業推奨(Q12)、総合評価(Q13)の項目からなる。なお、以下において、各項目はコロン以下の語句で統一して表記した。

図1は区分(A)全授業に対する平均値を用いた相関を示したヒートマップである。総合評価(Q13)は授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)と、値として0.7以上の強い正の相関を持っていることが分かる。これは、前期の結果と概ね同じ傾向を示している。一方で課題分量(Q8)は弱い負の相関をもっている。難易度(Q3)は、表4の基準からいえば「相関なし」となる。

図2は履修者が区分(B)20名以上の授業における平均値の相関である。総合評価(Q13)との正の相関については授業推奨(Q12)を除き全授業の場合と大差ない。授業推奨(Q12)は0.9以上であり、非常に強い相関が確認できた。これは、前期の結果と同様である。総合評価(Q13)と負の相関については、難易度(Q3)の絶対値が大きくなっている。また、難易度(Q3)と内容理解(Q11)の間に中程度、難易度(Q3)と授業推奨(Q12)、課題分量(Q8)と授業推奨(Q12)の間に弱い負の相関がみられる。ただし、前期の結果と比べて、負の相関の絶対値は小さくなっている。その他の項目についても変動はあるが、評価に影響しない程度の変化である。

図3は区分(B)履修者が20名未満の授業における平均値の相関である。総合評価(Q13)との正の相関については絶対値は小さくなっているが、概ね全授業と同じ傾向である。負の相関については、授業推奨(Q12)と課題分量(Q8)・取組時間(Q10)、課題分量(Q8)とLMS(Q6)の間に中程度の負の相関が確認できた。また、前期の結果よりも弱い相関ではあるが、負の相関が多くみられた。

図4は区分(C)回答数20以上の授業における平均値の相関である。履修者が20名以上の授業における平均値の正の相関の場合と傾向は変わらないが、相関がより強く出ていることが分かる。総合評価(Q13)と負の相関については、難易度(Q3)および課題分量(Q8)との間に中程度の負の相関が確認できた。難易度(Q3)については、内容理解(Q11)、授業推奨(Q12)、興味関心(Q2)の間でも中程度の負の相関が確認できた。課題分量(Q8)については、指示(Q4)、授業推奨(Q12)でも中程度の負の相関が確認できた。前期と比較して、全体的に負の相関が強く出ている。

図5は区分(C)回答数20未満の授業における平均値の相関である。回答数20未満の授業の相関関数の結果は、履修者が20名未満の授業における平均値の相関と同じ傾向であるが、全体として正の相関が強まっていることがわかる。また、前期の結果よりも弱い相関ではあるが、負の相関が多くみられた。

図6は区分(D)教養科目の授業における平均値の相関である。相関の傾向は区分(A)～(C)と異なり、総合評価(Q13)と内容理解(Q11)および資料理解(Q7)との間の正の相関が中程度の相関に弱まっている。総合評価(Q13)と授業推奨(Q12)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)は変わらず高い正の相関を示している。負の相関については、総合評価(Q13)と課題分量(Q8)との間に中程度の負の相関が確認できた。課題分量(Q8)については、授業推奨(Q12)、指示(Q4)、双方向性(Q5)、興味関心(Q2)、資料理解(Q7)、内容理解(Q11)との間でも中程度の負の相関が確認できた。課題分量(Q8)との中程度の負の相関は前期には確認できなかったため、後期の特徴である。

図7は区分(D)専門科目の授業における平均値の相関である。正の相関に関する傾向は区分(A)～(C)と変わらない。前期では総合評価(Q13)と難易度(Q3)や課題分量(Q8)との間で負の相関が確認できなかったが、総合評価(Q13)と課題分量(Q8)との間で弱い負の相関がみられる。また、前期と比べて、全体的に弱い負の相関が多くみられる。ただし、課題分量(Q8)との負の相関は教養科目よりも弱いため、これは教養科目と専門科目の大きな違いとして捉えられる。

### 第 3.3.2 節 中央値の相関

本小節では、回答項目毎に算出した中央値を用い、分析した結果を示す。平均値はよく使われる指標であり、分布の影響を多少は取り入れている。しかし、平均値が意味を持つにはデータが間隔尺度でなければならない。また、平均値は外れ値の影響を受けやすい。そこで、本小節では順序尺度に対して利用できる中央値を用いる。中央値は分布の情報を取り込むことは十分にできないが、ロバストであることから極端な評価の影響を避けることができる。以下では中央値からスピアマンの相関係数を求めた結果を示す(図 8~14)。本小節では以下に見るように、中央値を用いた相関係数の絶対値が平均値を用いた相関係数の絶対値より小さめに出ることを考慮し、正の相関について 0.5 以上のものを確認する。

図 8 は区分(A)全授業における中央値の相関を示したヒートマップである。まず、全般的に、中央値を用いた相関係数は平均値を用いた相関係数より小さいことが分かる。基本的な相関の傾向は平均値と同様である。総合評価(Q13)との相関係数が 0.5 以上のものは、授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、資料理解(Q7)、双方向性(Q5)、指示(Q4)、興味関心(Q2)となる。総合評価(Q13)と負の相関を示すものは、表 4 の基準では「相関なし」の範囲である。強弱の違いはあるものの、これは前期と同じ傾向である。

図 9 は区分(B)履修者数が20名以上の授業における中央値の相関である。基本的な傾向は区分(A)全授業を対象にした場合と変わらないが、総合評価(Q13)と内容理解(Q11)との正の相関はやや弱まっている。負の相関関係については、相関係数の絶対値が全授業の場合よりやや大きくなる。総合評価(Q13)とは難易度(Q3)および取組時間(Q10)との間で弱い負の相関がみられる。また、難易度(Q3)は内容理解(Q11)および授業推奨(Q12)と間でも弱い負の相関がみられる。前期と比較すると、全体として正の相関は強まっており、負の相関が弱まっていることが確認できた。平均値と比較すると、正の相関は同じ傾向であるが、負の相関では相関の強弱に違いが確認できた。

図 10 は区分(B)履修者数が20名未満の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)と正の相関をもつ項目は、区分(A)全授業を対象にした場合と基本的には変わらない。一方、負の相関関係については、授業推奨(Q12)と課題分量(Q8)、内容理解(Q11)と予習復習時間(Q9)との間で負の相関が強まっている。前期と比較すると、全体として正の相関は弱まっており、負の相関が強まっていることが確認できた。平均値と比較すると、正と負の相関は同じ傾向であるが、中央値の相関の方が弱く出ていることが確認できた。

図 11 は区分(C)回答数が 20 以上の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)と正の相関をもつ項目は、区分(A)全授業を対象にした場合と基本的には変わらない。負の相関については、難易度(Q3)と総合評価(Q13)、授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)との間に中程度の負の相関が確認できた。前期と比較すると、全体として正の相関は強まっており、負の相関が弱まっていることが確認できた。平均値と比較すると、正と負の相関は同じ傾向であるが、中央値の相関の方が弱く出ていることが確認できた。なお、課題分量(Q8)の数値が出ていないのは、全て同じ評価であるため相関係数が得られなかったことを意味している。

図 12 は区分(C)回答数が 20 未満の授業における中央値の相関である。総合評価(Q13)は(A)全授業と同じ傾向である。負の相関は総合評価(Q13)以外で確認でき、授業推奨(Q12)と課題分量(Q8)との間に中程度の負の相関が確認できた。また、授業推奨(Q12)と取組時間(Q10)、LMS(Q6)と課題分量(Q8)および取組時間(Q10)との間に弱い負の相関がみられる。前期と比べると、全体として弱い負の相関が多くみられた。平均値と比較すると、正負の相関ともに同じ傾向である。

図 13 は区分(D)教養科目における中央値の相関である。総合評価(Q13)との正の相関は、区分(A)(B)(C)と同じ傾向であるが、全体的に相関の強さが弱まっている。負の相関については、課題分量(Q8)と総合評価(Q13)、授業推奨(Q12)、内容理解(Q11)、LMS(Q6)との間に弱い負の相関がみられる。全体的に相関が弱

まっているが、課題分量(Q8)と各項目との間に負の相関がみられるのは平均値と同じ傾向である。また、内容理解(Q11)は、課題分量(Q8)のほか、取組時間(Q10)と予習復習時間(Q9)との間にも弱い負の相関がみられた。前期と比べると、全体として正の相関が弱く出ており、負の相関がやや強く出ていた。

図 14 は区分(D)専門科目における中央値の相関である。総合評価(Q13)との正の相関は、(A)(B)(C)と同じ傾向である。負の相関については、表 4 の基準を踏まえれば、いずれも「相関なし」の範囲である。これは、平均値および前期と比べて異なる点となる。

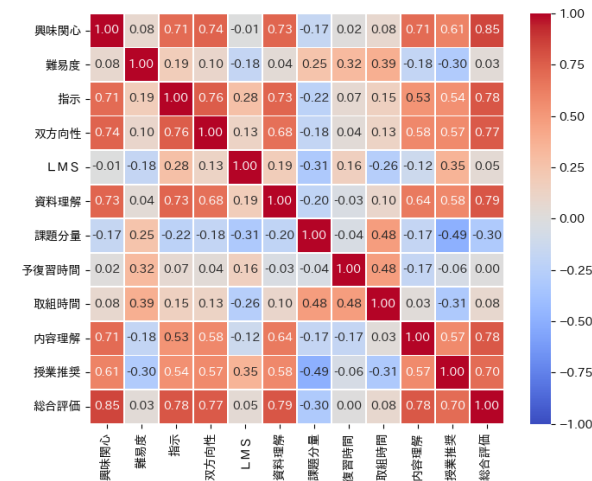


図 1 全授業における項目の平均値の相関

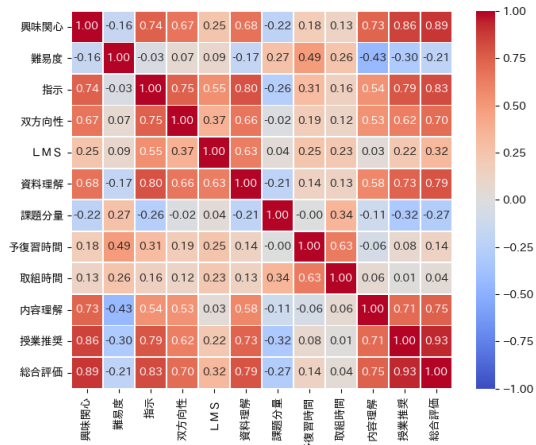


図 2 登録者が20名以上の授業における平均値の相関

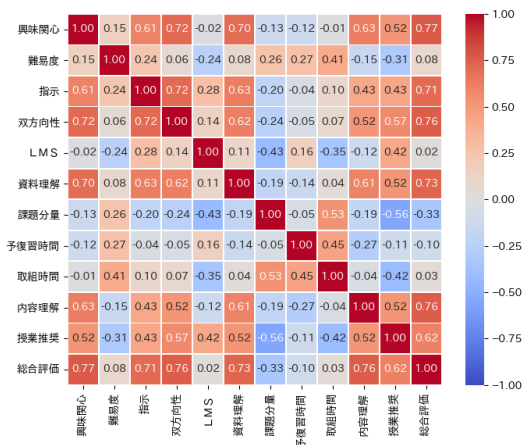


図 3 登録者が20名未満の授業における平均値の相関

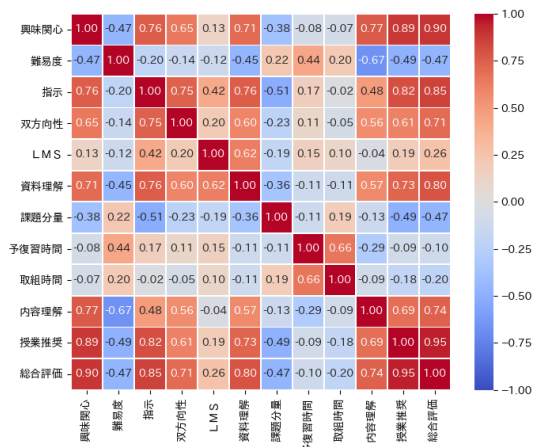


図 4 回答数 20 以上の授業における平均値の相関

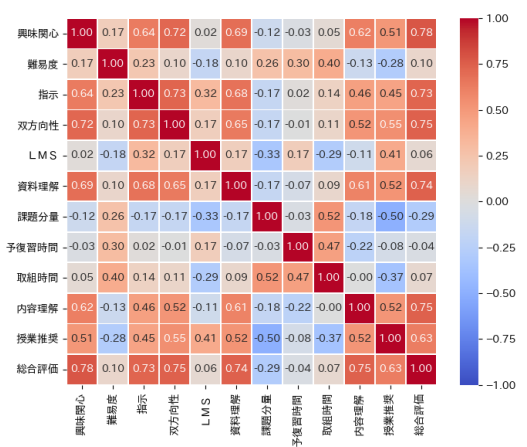


図 5 回答数が 20 未満の授業における平均値の相関

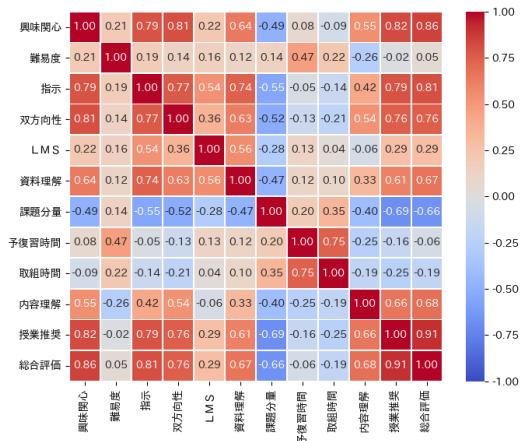


図 6 教養科目における平均値の相関

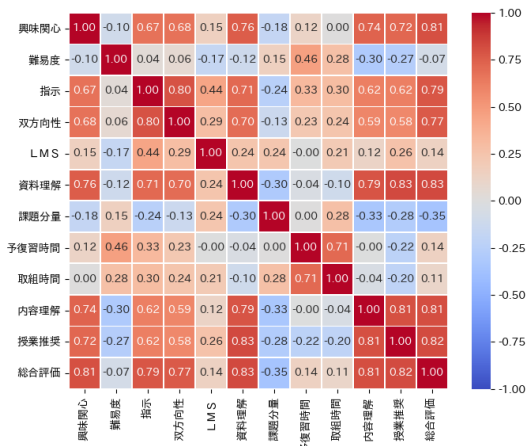


図 7 専門科目における平均値の相関

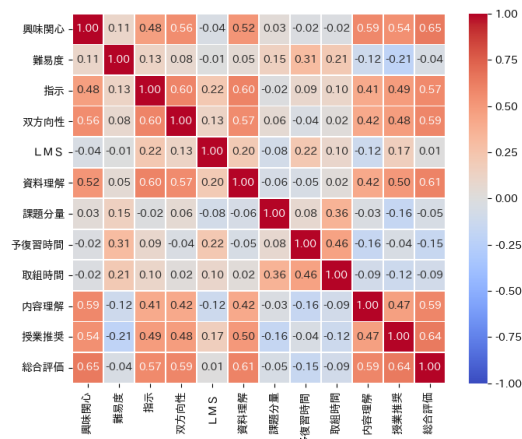


図 8 全授業における中央値の相関

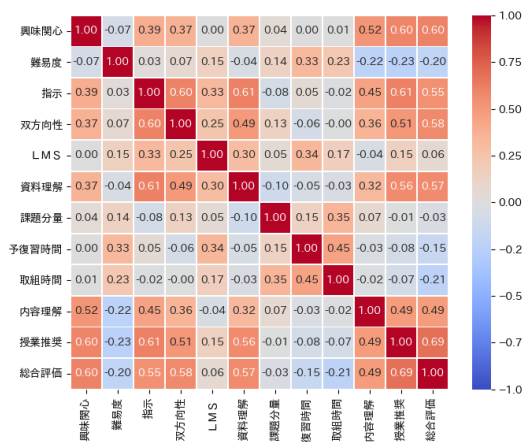


図 9 履修者数が 20 名以上の授業における中央値の相関

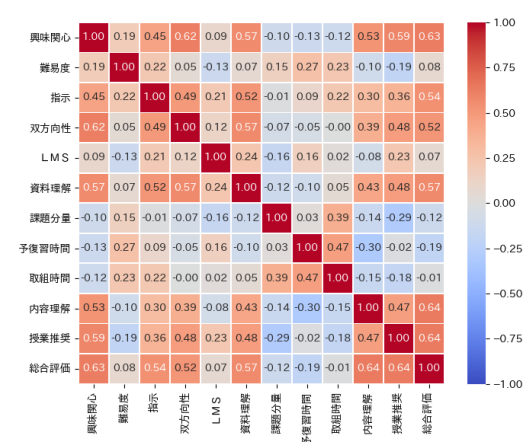


図 10 履修者数が 20 名未満の授業における中央値の相関

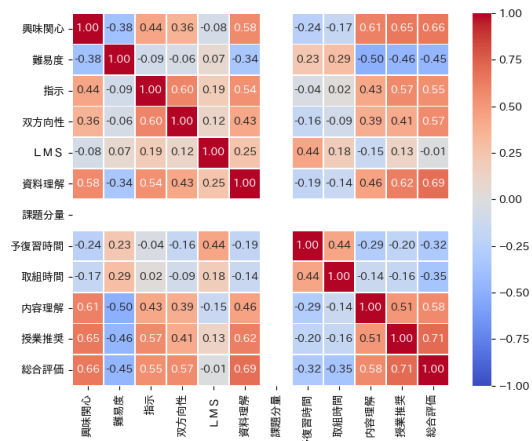


図 11 回答数が 20 以上の授業における中央値の相関  
※課題分量の数値が出ていないのは、全て同じ評価であるため相関係数が得られなかったためである。

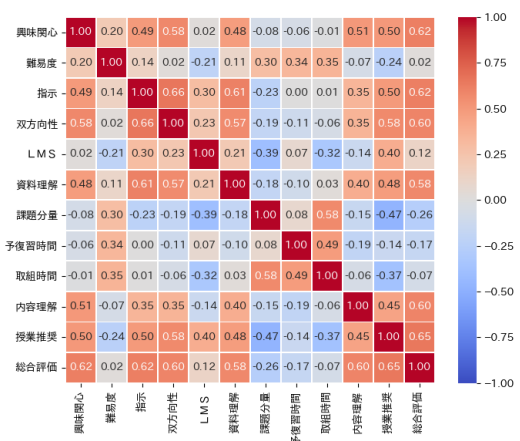


図 12 回答数が 20 未満の授業における中央値の相関

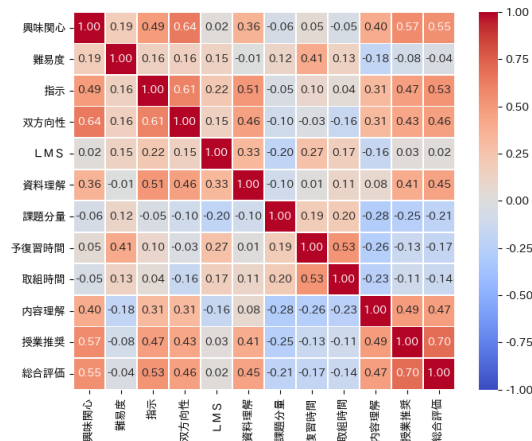


図 13 教養科目における中央値の相関

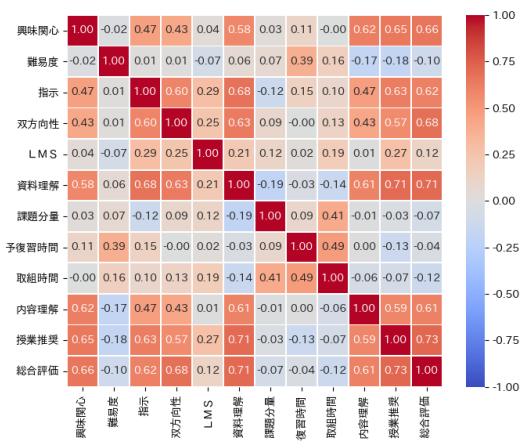


図 14 専門科目における中央値の相関

## 第4節 議論と結論

本報告では、令和7(2025)年度前期授業評価アンケート分析報告書の結果を踏まえ、後期でも同様の傾向が見られるのかを確認した。後期の授業評価アンケートにおいても、前期と同様に理解度と推奨度の項目が設けられた。また、後期の分析でも、平均値に加え中央値も採用し、クラスサイズの大小だけでなく教養科目と専門科目の区分も行い、アンケートの各項目間の相関関係を確認した。

まず、主要項目の推移について、過去のアンケート結果を用いて検討した。科目毎の評価(平均値)の平均値および評価(平均値)の中央値は、令和7(2025)年度においても前期より後期の方が履修者数と回答率が低下し、興味関心、難易度、総合評価(満足度)、学習時間が微増した。このことから、本年度もこれまでと同様の学生の学修傾向が続いていると考えられる。今回注目すべき結果としては、2021年度以降の前期・後期の興味関心および総合評価において、2025年度後期が最も高い値となったことである。平均値については、2025年度前期の結果も、それ以前の結果と比べて最も高い値となっており、2025年度に授業が改善されたと考えられる。これは、個々の教員の授業改善努力だけでなく、2025年度から始まった新カリキュラムが興味関心および総合評価の向上に貢献していることを示している可能性がある。

本報告で採用した相関係数の影響については次の結果が得られた。平均値を用いたピアソンの相関係数による相関の傾向と、中央値を用いたスピアマンの相関係数による相関の傾向は大きくは変わらず、相関の強さについては差がみられた。このことは相関関係の抽出についてどちらの量であってもよいことを示唆するが、相関の強さについては注意を払う必要があることを意味する。このことを踏まえた上で、アンケート結果の相関関係を理解する必要がある。

ゼミナール・卒業論文を除く全科目を対象として相関関係を調べたところ、平均値における総合評価は、前期と同様に、授業推奨・内容理解・資料理解・双方向性・指示・興味関心の間に強い相関がみられた。一方、負の相関では、前期にはみられなかった課題分量と授業推奨の間に中程度の負の相関が確認できた。ただし、中央値においては、全体として相関係数が平均値より小さく、負の相関は「相関なし」の範囲であった。

また、クラスサイズによる傾向を明らかにするため、授業を分類して同様の分析を試みた。履修者数が20名以上および回答数が20名以上のものは、比較的クラスサイズが大きい授業に相当する。どちらも平均値・中央値ともに傾向が類似している。クラスサイズが大きい場合、平均値の総合評価と授業推奨との正の相関は0.9以上であり、強い相関が確認できた。これは、前期の結果と同様である。推奨される授業は、その影響によって履修者が増えると考えられるため、クラスサイズが大きければ、総合評価と授業推奨との間に正の相関が出やすい可能性がある。なお、クラスサイズの大きさについては、履修登録時に学生がリアルタイムで履修者数を把握できるため、履修者数の多い科目を選ぶ可能性があり、履修者数の多い科目は履修者数がさらに増える可能性がある。クラスサイズが大きい場合の負の相関については、難易度と内容理解の間に中程度の負の相関がみられた。これも前期の結果と同様である。クラスサイズが小さい場合の負の相関については、前期とは異なり、課題分量と授業推奨の間に中程度の負の相関が確認できた。難易度と内容理解の間に負の相関が出ることは直感的に理解できるものの、クラスサイズが小さい方が個別の学生に教員も対応しやすいため、難易度と内容理解の間に負の相関がみられないと考えられる。一方、クラスサイズが大きい場合、学生への個別対応が難しくなるため、科目の内容を理解してもらうには適切な難易度設定が必要となる可能性がある。クラスサイズが小さい場合における課題分量と授業推奨の負の相関は、前期にはみられない傾向であり、また全体的に後期の方が負の相関が強く出ているため、後期に設置されている科目の特性が影響している可能性がある。

本分析では、科目を教養科目と専門科目に分け、各々において相関係数を計算することで教養科目と専門科目での相関関係も明らかにした。教養科目と専門科目のどちらも平均値・中央値ともに傾向は類似していた。教養科目では、前期とは異なり、総合評価と難易度との間に負の相関関係はみられなかった。しかし、総合評価と課題分量との間には、負の相関が確認できた。前期でも同じ傾向が確認できたことから、総合評価と課題分量との間に負の相関があると言える。一方、専門科目でも負の相関がみられるものの、教養科目ほど相関が強い。学生が専門性を高めるために特定の学部・学科に進学することを考慮すると、教養科目と専門科目の課題分量において学生の認識が異なる可能性がある。さらに、教養科目では、課題分量について、総合評価以外の項目との間でも負の相関が確認できた。特に、課題分量と内容理解および授業推奨との間の負の相関は、後期の平均値・中央値を用いた結果だけでなく、前期の結果でも確認できた。そのため、教養科目においては課題分量の調整が必要となる可能性がある。

本分析では、全般的な相関関係が明らかとなった一方、クラスサイズの違いや教養科目と専門科目での違いがあることが示された。また、前期と後期の平均値・中央値の結果は、相関の強弱はあるものの概ね同じ傾向の相関関係を示した。前期と後期の比較では、正の相関では同様の傾向が確認できたが、負の相関では、一部相違点があることが確認できた。本報告が履修者のより深い学びと能力向上の一助となることを期待したい。

## 付録 アンケートの設問内容

【設問 1】	あなたがこの授業を履修した理由は何ですか 内容に興味があったから／必修科目だから／時間割上都合がよかったから／資格取得のため／その他
【設問 2】	この授業を受けて、授業の内容に興味や関心をもちましたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 3】	この授業の難易度は、あなたにとって高かったですか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 4】	この授業に関する教員の指示(課題の提出方法など)は適切でしたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 5】	この授業で教員-学生間のやりとりは十分におこなわれていましたか(例えば、学生の報告や質問に対して教員が十分に評価や回答をおこなっていたか) おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 6】	この授業で教員は「in Campus」の LMS 機能を十分に活用していましたか。 (例えば、教材や課題が定期的に掲載されている、アンケートや小テストが行われている、教員と学生のやりとりが in Campus 上で行っているかなど。) おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 7】	この授業の資料はわかりやすいものでしたか おおいにそうである／どちらかといえばそうである／どちらともいえない／どちらかといえばそうでない／まったくそうでない
【設問 8】	この授業に関する課題分量について教えてください 多すぎる／やや多い／ちょうど良い／やや少ない／少なすぎる
【設問 9】	あなたは、この授業 1 回あたり、予習・復習にどのくらい時間をとりましたか 180 分以上～0 分(30 分刻み)
【設問 10】	あなたは、この授業 1 回あたり、課題にどのくらい時間をとりましたか 180 分以上～0 分(30 分刻み)
【設問 11】	この授業の内容は十分に理解できましたか 理解できた／どちらかといえば理解できた／どちらともいえない／どちらかといえば 理解できない／理解できない
【設問 12】	この授業の履修を他の学生に推奨できますか 推奨できる／どちらかといえば推奨できる／どちらともいえない／どちらかといえば 推奨できない／推奨できない
【設問 13-a】	この授業を総合的に評価して満足していますか 大変満足している／どちらかといえば満足している／どちらともいえない／どちらかといえば満足していない／まったく満足していない
【設問 13-b】	そうした評価をする具体的理由は何ですか
【設問 14】	この授業を受けて良かった点があれば、具体的に記入してください (例えば、配付資料が分かりやすい、in Campus から質問した内容を丁寧に返答してくれるなど。)
【設問 15】	この授業を受けて改善してほしい点があれば、具体的に記入してください
【設問 16】	授業評価アンケートの回答データは、千葉経済大学(以下、大学)で厳重に管理され、個人を特定できる形で公開されることはありません。 調査・研究のため、このデータを大学が認可した研究において利用することに同意されますか 同意する／同意しない

付録:表 1 アンケート項目の内容